

PHOTO REPORT



礼文・花の楽園

「自然写真家からのメッセージ」写真・文 杉田美野里



そまだ みのり
写真家。1955年東京八王子市生まれ。92年から夫で写真家の宮本誠一郎氏とともに礼文島在住。利尻、礼文、サロベツを中心とした写真撮影のほか、出版・講演活動を通じて自然とのかかわり方を提案している。主な著書に花散策ガイド「新版 礼文」「新版 利尻」「サロベツ」の花の道シリーズ3部作（宮本氏と共著、北海道新聞社）などがある。撮影／立花 富美雄

高山にしか咲かない花と合える島

花の島として有名な礼文島。海をバックに高山植物が群れ咲く風景は、たぐいまれな美しさです。冬の季節風の影響もあり島の西側斜面は標高は低くとも高山帯のような厳しい環境です。そんな場所を選んで氷河期に南下した高山植物の仲間が今も息づきます。

そして人が暮らすエリアと国立公園の保護地区が同じ高さ、隣り合わせで小さな島に同居します。それは最大の魅力であると同時に、人の営みの影響を受けやすい危険を含みます。レプンアツモリソウをはじめとする高山植物を盗掘から守る努力も続けられていますが、車道からすぐの所に生育するため、容易に盗まれてしまいます。外来植物も原生花園に侵入しやすい環境です。ハイカーも多すぎると、歩道周辺の植生は痛んでいきます。「花は島の宝」、授かったゆえに、守る苦勞も尽きることはいまありません。島の人口は少しずつ減り続けています。「島人（しまびと）の元気」と「自然の健康」、そのバランスのとれた島であることが、魅力的な島であり続ける唯一の道だと思っています。

溶けてしまったレプンアツモリソウ

礼文島の花々の多くは寒冷な気候を好む高山植物の仲間です。温暖化が進行すれば暖地の植物にその聖域を奪われるのではと心配です。去年も今年も雪の消えるのが早く、早春の花であるレプンアツモリソウはいち早くつぼみを膨らませました。そして遅霜に当たって開花直前に茶色く溶けてしまったものも多く見られました。今年はエノハクサイチゲやレプンコザクラなどの花も例年より3週間くらい早い開花となりましたが、開花後低温が続きいまひとつ元氣のない咲き方でした。温暖化の怖さをなんとなく口にするのではなく、植物の様子をきちんと観察してその変化を記録し、花たちの発するSOSを見逃さないようにしなければと痛感しています。



レプンアツモリソウは5月末から6月初旬が花の季節。去年と今年は気温の上下が激しく、つぼみのまま枯れてしまったものも見られた。